

注

- 1) 上掲書によれば、同一対象に同一のことばが対応しているものを社会中心語と呼び、同一人物が「夫」「父」等異なった名称で呼ばれるというように、同一対象が異なったことばで表されるものを自己中心語と呼んでいる。「右・左」などもそうである。
- 2) プライバシーもあると思い、報告者の氏名は記さなかった。
- 3) 上掲書 (p. 179) に次の記述がある。: 日本では親や先生が子供を叱る時に、子供の名前を呼び捨てにして叱る。「太郎！止めなさい」という具合に。(筆者：先生は姓だけを呼ぶ場合が多いと思われる)
- 4) 友人にやがて2才になる孫(娘の子)がいる。自分を「ばあば」と呼ばせているが、その父親はまだ「おかあさん」と呼んでいる。
- 5) 年令や結婚前からの親密度などにより異なる。例えば、筆者姉妹の兄嫁は年令が一番若い。その故「おねえさん」ではなく「名前+さん」で呼ばれている。また妹の夫は、その結婚以前からの知人であるので、相変わらず「姓+さん」で呼ぶ。それに倣って夫も、妹の夫(義弟)を「姓+さん」で呼ぶ。自分より年上の筆者の兄(義兄)の方の他称は「名前+さん」、対称は「姓+さん」である。
- 6) 夫は相変わらず「ぼく」を使っている。年代差があろう。
- 7) 鈴木氏は「娘さん」という呼びかけが他人について可能であるという例外的現象に解答を示さなかった (p. 159) が、これも関連する現象かもしれない。

引用書

鈴木孝夫(1973)「ことばと文化」岩波

バーリング(1974)「言語と文化」(高原・本名訳) ミネルヴァ書房

うに使われる。この方言の「誰誰の」を冠する言い方が面白い。方言的な差異はあるが、夫（妻）には「私（貴方）の」、おとう（かあ）さんには「私（貴方）達の」、おじい（ばあ）さんには「うち（おたく）の」と言う。コミュニケーション・グループの広がりがあるわけではない。またこの呼称で指される人が各グループ毎にいるから、他と区別する手段となっていることがわかる。

上掲書では、対象依存の自己規定の故、日本人が外国人（欧米人）に対して不安を感じる (p. 198) としているが、そうではあるまい。既述したように、未知の人とコミュニケーション・グループに入るためには、その位置付けのため、性別及び年齢相応の身体的特徴が必要である。欧米人に対しては、これを推察するのが難しい。身長や髪の色などは全く役に立たない。また、たとえそれがわかっていても尚、問題は解決しない。

夫の知人にアメリカ人の大学教授がいる。彼は学問的にも年齢的にも先輩で、日本に滞在したことがあるので、日本語が少々できる。そして「日本人は日本語で話しても、日本語を使ってくれない」とこぼしていた。ある時パリで突然電話があり、たどたどしい「もしもし伊豆山さんですか」が聞こえた。誰だか分かったので日本語で答えようとしたが、はたとつまった。英語で「エリオット」と個人名で呼び合い、家族ぐるみ仲良くしている彼に「L 先生ですか」ではよそよそしい。「L さんですか」はそっけない。昔の恋人でもないのに「あらエリオット」とも言えない。結局、口をついて出てきたのは英語だった。日本では、夫の尊敬すべき学問上の知人と、家族ぐるみ交際して冗談を言い合うようなグループを作る機会は殆ど無い。対応する呼称を見つけることは難しい。

外国語も自国語も学べば学ぶほど面白い。学生達もそう感じたと言っている。

付 記

引用したレポートを提出した学生（平成 4 年度及び 5 年度に受講）の名前は次のとおりである。ここには触れなかったが、他にも興味深い事実を報告したものもあったことを付け加えておきたい。

明石真記子、市原玲子、内間さくら、加賀田 緑、柏木久美子、加藤麻子、川合敦子、草柳順子、園生晃子、守菜津子、安田志津

これは、日本語の特徴と日本人の行動様式をよく示している。日本語の呼称は常にコミュニケーション・グループの内と外を示し、その集団への一体感を大切にし、呼称によって確認する。

上掲書は「役割の固定化」として、アメリカでは大学院生がやがて教授を名前だけで呼び捨てにするが、「私は卒業後 20 年以上たった今でも、昔教えて頂いた老教授を先生としかよぶことができない。(p. 194)」例をあげている。しかし、それは「特定のペア」であるから、呼称も特定化してしまったものであろう。

例えば、筆者の大学時代の指導教授を囲む会で、今は年とられた且つての教授は、介添のお嫁さんに出席者を一人ずつ紹介するにあたり、「姓＋先生」を用いた。出席者は一人を除き大学教授なのだった。だがその後の歓談では、昔通り「姓＋くん」になっていた。

筆者自身も、現在東京大学教授である昔の友人に、学生達の前で会う時や、自分が教えを乞う時などは「先生」と言う。また電話で取り次ぎを頼むときは「姓＋先生」と言い、本人と話し出すと昔通り「姓＋さん」となる。

友人どうし親しきが増すと呼称は変わる。ペアが変わらなくても、コミュニケーション・グループの質が変われば呼称も変わってくるのだろう。それにより、今まではただクラスメートだったのが仲良しグループや親友になったことを示すのである。

9. 終わりに

日本語の話しことばでは、自分がどのような相手とどのようなコミュニケーション・グループで話しているかは極めて重要である。それは、まず自分と相手とが、「同一集団に属している(いない)」を選択することなのである。話し手のコミュニケーション・グループへの関わり方が呼称を定める。

そして最大の特色は、自分(達)を外側からみることによって、つまり社会的な判断規準にあてはめることによって、親族間の呼称が選択されることである。俗な言葉で言い替えれば、「世間様」に従っているのである。この最大のコミュニケーション・グループ(世間・社会)に合致させながら、いろいろな手段でこの最小の緊密なグループの独自性を保ち続けるのである。これは日本人の行動によく表れるのではないだろうか。

ところで、琉球方言では祖父母・父母に対する親族名称と呼称の区別が無い。夫・妻に相当する語は東京語同様呼称にはならないが「家内・主人」のよ

ある⁷⁾。

どうも、外側の規準から判断して、自分が「赤ちゃん」や「おにいちゃん」類でないとなった時、呼称を変えるようである。

8.2 コミュニケーション・グループの異同に伴うもの

(37) 引越しを境に母親の呼ばれ方が変わった。以前は「アッコちゃんのママ」であった。子供が成長してからの新住居では、犬の散歩仲間の飼い主から「ロンちゃんのママ」と呼ばれている。

これは(17)のように、ペットが関係している。(17)は話し手と犬だけだったが、(37)は、コミュニケーション・グループがペットを契機として成り立っていることを示す。当然のことながら、「ママ」は犬を産んだわけではない。「アッコちゃんのママ」は子供がいなければ知合いにならなかったグループの間の呼称である。

筆者にも「陽子ちゃんのママ」と呼ぶ隣人がいる。「陽子ちゃん」は息子の幼稚園同級生でもある。やがて小学生になった息子は陽子ちゃんの弟の「卓ちゃん」とばかり遊ぶようになったが、呼称の方は「卓ちゃんのママ」とはならなかった。

呼称の選択は、最初の契機が大切で、そのコミュニケーショングループが質・量など変化しない限り呼称も変わらない。

(38) 市の体育委員をしている父及びその体育委員の仲間と母と、一緒にバドミントンをした。その時、「次はお父さんの番だ」「お母さんはミスをしたね」等と言っていた。普通は「Kさん」と言っている筈なのに。

上例は、他称か対称かはっきりしない。この集団が仲良く時を過ごすためには、「kさん」の3人を差別なく区別して呼ばなければならない。それには三つの選択がある。一つは全員を個人名で呼ぶ。これは習慣に外れる。次は、日頃の自分達の仲間に二人が加わったのを明示する「Kさん」「奥さん」「お嬢さん」である。しかし二人に対し「Kさん」の外側からの呼称を使うのではグループの一体感を損なう。つまり同一コミュニケーション・グループであるという親しい気持ちが表せない。最後の選択は逆に「kさん」のコミュニケーショングループに加わって、その特殊化した呼称を使用することになる。「隣のパパ」が「パパ」と呼ばれるように、このコミュニケーショングループでは「k家のお父さん」は「お父さん」なのである。つまり、体育委員グループではなくKグループの方に参加し、Kグループを拡大したのである。

最近は「おばあさん」類を嫌い、さまざまな呼び方がある。前述の一般「おばあさん」類の意味特徴にそぐわない、若々しい祖父母がふえたからであろう。上例は親世代への呼称だから珍しいが、このようなことが起こり得るのも、既述のように「おかあさん」類が親族名称でないことを示している。

幼時の「パパ」「ママ」から「おとうさん」類に変えたという報告は多い。わが家もその中に含まれる。中学生になった息子のたつての要望により変えた経験がある。

成人男子が「おとうさん」類を「おやじ(さん)」類に変えるのは、極めて一般的である。

家族の年齢があがるにつれ、呼称も違ってくる。この事実は、日本語の親族呼称が自己中心語ではないことを窺わせる。「役割固定」ではない面がある。

上掲書では、幼い男児に対して「ぼく(ちゃん)」と呼びかけることができる(他称にも使える)のが、最年少者への自己同一化の一例になっている(p. 172)。しかし、それなら何故「あたし(ち)」ちゃんがないのだろうか。女の子にこそ一層自己同一化をしそうなものではないか。「ぼく」は単なる自己中心語(自称の代名詞)ではないのだろう。

例えば筆者の息子(昭和42年生)は、高校時代いつの間にか「ぼく」から「わたし」に変えた。以前から使っていた「おれ」はそのまま残っており、現在は「わたし」「じぶん」「おれ」の三通りを用いていると言う。但し「ぼくら」は使うそうである。

「先生」が社会中心語でありながら、自称・対称・他称に使われるように、「ぼく」は、自称代名詞ではなく、社会中心語(男、若い、幼い、等の意味特徴を持つ。「ぼうや」に似ている)にすぎないか、そうなりつつあるのかもしれない⁶⁾。

「ぼくちゃん」「おれさま」「あなたさま」「おまえさん」などの語はあるが、「わたし」「わたくし」「あたし」などは、そのような接辞が付かない。日本語(東京方言など)では、「わたし」類以外は代名詞とは言い難い。「ぼく」は「あたし」と比べて、男女差以上に基本的な語彙的・機能的差異を持っているのではなからうか。

もっとも、男女差による差にも注意しなければならない。例えば「お嬢様(さん、ちゃん)」だが「ぼっちゃん」である。その故か「お嬢さん」と同じ年齢の男性が「ぼっちゃん」と呼ばれることは他称でも少なく、対称では全くといってよいほど無いようである。また「坊や」は一般的だが「嬢や」は特殊で

ん」と称し、そう呼ばせるのではない。一般の場合同様、外側からの特徴が選択の基準である。次に、話し手の周囲・背景（家風・個性 *etc*）等により実際の語形（ママ・おかあさま・・・）が選択される。そして夫を、「おとうさん（パパ）」類で呼ぶ。わが「子」の父だからではない。子を持つ男という一般的な判断に従ったのである。

このグループは、更に成員を増やす。その際の呼称の選択は、やはり外側からの判断規準に則っている。出会う未知の人は新生児だから、一見彼を中心とした彼の立場に同調した選択のようにみえる。さて、強固に結び付いたこのグループ内で、同一呼称が常に同一人物を指すから、やがてそれが、愛称・あだ名同様に特定化する。同じ親密度、同じ資格の成員は同じ呼称を用いる。

同じグループとみられる姻戚関係や世代差のある親族間での微妙な違いを思いだそう。接頭辞「お」がつくか、接尾辞が「ちゃん」「ちゃま」「さん」「さま」などのどれを選ぶかなどは、その話し手の判断によるサブ・グループを示している。話し手はグループの多層性の中で常にその位置をみつけていく。

日本語の親族呼称では、「上下」や「自己中心」が基なのではない。話し手のコミュニケーション・グループに対する認識が基である。自己グループにおける最初の呼称採用の判断基準は、未知の者への呼称を決める社会の目を採用した。従って、「敦子が」「おねえちゃんが」「おかあさんが」など外からの呼称が自称として全て使用できる。特に年少者関係で使用されるのは、呼称選択の判断基準の原点を示すものだからだろう。

8. 呼称の獲得と変化

先に、呼称は一旦獲得されると変化しにくい例を見た。しかしまた、変化があるという事実も重要である。

8.1 コミュニケーション・グループ成員の成長に伴う変化

(35) 祖母を「おばば」と呼ぶ。昔は「おばあちゃん」だったが年令が上がるにつれ照れくさくなり、一度このように呼んだのが定着した。

(36) 両親を「パパ」「ママ」と呼んでいた。大きくなるにつれ人前でそう呼ぶことに恥ずかしさを覚えるようになったが、「おとうさん」類で呼ぶのも抵抗があった。ところがテレビドラマ中の大学生が祖母を「まどかさん」と呼んでいるのを見た母が「若々しくてすてきだ」と言ったので、それ以来、母が喜ぶ「やすこさん」で呼び、最近「やっこちゃん」とよんでいる。

ではなく「鳥さんがいる」というように。新生児から幼児までを相手にする時には、「あなた」の類を使わず、頻繁に名前を呼ぶ。筆者はアメリカで赤ちゃんに対して you を使うという当然のことに驚きを感じ、苦笑を禁じ得なかった経験がある。

同様に、子供に対して「わたし」の類を使わず、「先生」「ママ」「おじさん」等が用いられる。しかし、「先生」と呼びかける保護者の前で、自分を「先生」と自称することはない。前掲書では「相手の規定が自己規定に先行する」から、「小学校の先生は、生徒に対するときだけ自分を先生と称する (p. 197)」という。しかし大学、カルチャースクール、各種お稽古事などの「先生」が成人生徒の前で自分を「先生」と称することはまずない。

これら呼称の語彙は、自称としては年少者相手だけに使われるのだとしても、対称としてはもう少し広く用いられ、他称としては非常に広く用いられる。これらが本来一般呼称だからであろう。

7.2 内側の等質性と多様性

先に見たように、親族名称の父・兄類が他称として用いられるためには、話し手は相手の家族（コミュニケーション・グループ）の外側にいなければならない。内側、つまり自分の妹や娘達に自分達の父や夫を指して、「父は元気」とは言わない。「弟は病気」とも言わない。前者は呼称「おとうさん」と代えればよいが、後者は「おとうとさん」とも代えられない。ところが外側どうしの人なら互いに内側を親族名称で、外側を親族呼称及び親族名称＋接辞（-さん類）で言及することができる。つまり親族呼称は、自分の、相手の、他人の、親族に用いられ、更に親族以外にも一般的に用いられる。いわゆる親族呼称は、親族名称に「さん」をプラスしただけのものではないのである。

「父」は個人の父だが、「おとうさん」類はそのコミュニケーション・グループの「おとうさん」である。私の「おとうさん」は、兄弟姉妹の「おとうさん」であり、「おかあさん」にとっても「おとうさん」であり、場合によっては「おじいちゃん」と呼ばれる人にとっても「おとうさん」である。

妻が夫に「父が病気」と言えば、それは必ず自分の「父」を指す。「おとうさんが」と言えば、夫の父親をも指すことができる。

全く未知で出会いながら、後々まで関係を持つようになるのは、新生児を得た時だけであろう。生得的な関係の二人がコミュニケーション・グループを作る時、「おかあさん」類を選択するのは、子の立場から自分を「おかあさ

双子の兄弟姉妹は、親族関係としては「兄(姉)」がいるが、「にいさん」類は使わないことが多いようである。外観からは分からないからであろう。

前記(2)例の「おにいさん」の使われ方も、若者像を示し、上の解釈を支持する。

既述したように、一般のお年寄りとは、たとえ「ひいじい(ばあ)さん」でも、そのような呼び方をしない。特定の人のおじいさんであっても、外観は「おじい(ばあ)さん」の中のヴァリエーションに過ぎないからであろう。(17)(28)(29)の例もこれで解釈できる。

呼称詞「おじいさん」類が親族名称として確実に機能するのは、「ある個人の」という限定が、そのコミュニケーション・グループに理解されている時である。

「敦子さんの弟さん」が親族を指すように、「敦子(さん)のおじいさん」は敦子という個人の親族を表す。しかし、近隣の人が「伊豆山さんのおじいさん」と言う場合はそうとは限らない。

筆者の近隣に住む一人の御老人は、この30数年来「Oさんのおじいさん」と呼ばれている(他称)。白髪混じりで、顎髭が長く、常に和服である。ご夫婦二人きりで、縁者がおられるかどうか誰も知らない。知り合った頃は、まだせいぜい60代だった筈だが当時から少しも変わらぬ姿で、一度も「Oさんのおじさん」だったことがないのである。

「Xさんもおじいさんになったね」は二通りの意味がある。「孫ができた」を意味するのは、「あるコミュニケーション・グループ(Xさんの家族)でおいさんと呼ばれるようになった(一世代上になった)」。

もう一つの「年老了」は、「一般的に(最大のコミュニケーション・グループで)おじいさんと呼ばれるようになった」である。

前掲書による親族呼称の他人に対する虚構的用法の例 —「おねえちゃん。おばさんがさがしてあげましょう。」— は、架空に設定した年少者と同じ視点で相手や自分を眺めているように見える。しかし同じ事を年令の高い相手に言うとは思われない。たとえば「おじさん。おばあさんがさがしてあげましょう。」のような例は特殊であろう。同一家族中で、年令の高い母(おばあちゃん)が息子(おとうさん)と二人だけの会話で「おばあちゃんがおとうさんにしてあげますよ」のような自称・対称を使うことは滅多におこらない。孫達を含むコミュニケーション・グループの中でおこるのである。

小さい子供に対しては具体的語彙を用いるものである。例えば「鳥がいる」

これらは、話し手も相手も成人である。そして客観的な男女像への認識がある。年少者に「同調している」というわけではない。

「血縁関係のない人に対する虚構的用法」という時、上例のようなものは考えなかったのかもしれない。しかし「おじ（ば）さん」と類似した用法が、少ないながら近来聞かれるようになった。例えば近所（東京、下町）の店や露天市などで、筆者は呼びかけられる。

(34) 「おかあさん。安いよ。」

相手は大抵威勢のいいおにいさんかおじさんである。

7. 一般呼称の親族呼称化

血縁関係の無い人への一般的な呼称と親族呼称との関係を再考する。

7.1 外観と具体性

話し相手の獲得的な性質・資格等に対する知識が全く無く、生得的な性質に基づく呼称で呼びかける場合、フランス語などが性別の次に既婚か未婚か (Madame, Mademoiselle) を選んだのとは違って日本語は、選択の基準を外観による判断においたと考えられる。即ち、それは、まず性別と年令の示す身体的特徴、次に子供の有無である。

未知の人を性別・年令（相応の外観）から判断して言及するとき、「あちゃん」類、「おにい（ねえ）さん」類、「おじ（ば）さん」類、「おじい（ばあ）さん」類という世代段階がある。「おとう（かあ）さん」類は、「父や母となっているか、そのような外観の人」なのであろう。父・母となっていると認められる男・女だから、事実婚はできた筈である。従って、年齢的には若過ぎも老い過ぎもしない。

日本語では夫・妻に対する呼称はない。ある男女が夫妻関係にあると外観から判断することが、どうしてできようか。だが嬰兒・幼児・児童と共にいる成人男女を「おとうさん」類で捉えることはできる。子供がその場になくても、想定できればよい。だから、「夫（妻）」で指される人は、「おとう（かあ）さん」で呼ばれる人と原則的には無関係である。

これらの呼称詞が血縁関係の無い人に用いられるのは、「親族名称の虚構的用法」なのではなく、逆に、一般的呼称が、緊密且つ安定した特定小集団の中に当てはめられ、常に特定の人を指す習慣となり、親族名称のように感じられるのではないだろうか。

前掲書では「目上の人を地位名称で呼ぶことは普通」だが逆はないとしている。しかし社長が「山田部長（課長）」のように目下に対して他称を使用するのは普通であり、対称としても可能であろう。この場合、最下位の者に共感的同一化をしたとは言い難い。

「-長」はそのコミュニケーション・グループには一人しかいないから呼びかけられる。看護婦である「婦長さん」が配下の看護婦を「看護婦さん」と呼んでは呼称の役をなさない。しかしそのグループ外、例えば「患者さん」からは「婦長さん」とも「看護婦さん」とも呼ぶことができる。

その集団のただ一人を指し示す語（個人名、-長 *etc*）を除けば、呼称の使い手（話し手）は、その語が対象とする人（々）の外側にいなければならない。例えば、「患者さん」と呼びかける人は、患者ではないし、「お客さん」と呼びかける本人は客ではない。「おねえさん」と呼ぶ声でふりかえれば、その声の主は「おねえさん」ではなく、大抵は「おじさん」か「おばあさん」なのである。

呼称が外側から規制されるということに注目しよう。話し手がその呼称を使う際、まず外側からの認識—自分の位置に対する社会的・客観的な認識—が必要である。

ここで、もう一度親族呼称に戻ろう。

6.3 両親の呼称

上掲書によれば、親族名称の第一の虚構的用法の用語は、祖父母、おじ、おば、兄、姉の概念を含むものが、もっとも多く、「父及び母の概念を含むものは、少なくとも標準的な東京語では殆ど使われないようである」(p. 158)。しかし次例は東京生まれ、東京育ちの夫（学校勤務）のことばである。

(30) 「今日（土曜日）の学校説明会、おとうさんが大勢来たよ。去年は金曜日だったからおかあさんが多かったけど。」

同類例を求めれば：

(31) 幼児の手を引いている婦人に「おかあさん。落ちましたよ。」と、その子の落とし物を教えることがある。

(32) 交通安全教育で「おかあさん。お子さんの手をはなさないで」と標語的にいう。

(33) 学校の先生が面談で保護者に「お母さんもお父さんも協力して下さい」と言う。

対語ではないのである。

もし「弟」が「にいさん」と共に呼称となるのなら、どのようなになるか。

まず A・B・C の兄弟がいる。A は他から「にいさん」と呼ばれるだけだが、B 以下は「おとうと (さん)」と呼ばれるだけでは区別がつかないから、それぞれに名前を冠さなければならない。B は、「B おとうと (さん)」と同時に「B にいさん」と呼ばれる。「C おとうと (さん)」も何時「C にいさん」となるか分らない。本人より上は増えることがないが、下はまだ生まれるかもしれない。従って呼称は上のみの方が単純になる。

今仮定した煩雑な呼称体系をもつ言語も在り得るだろう。しかし日本の社会はそれを選ばなかった。むしろ名前 (愛称) 使用を好んだ。同世代の上下の別を客観的には重要視しなかったのである。

弟・妹・子・孫・甥・姪のような「分割線より下の者に対して親族名称で呼ぶことはできない」。しかしこれら親族名称は、家族・親族 (コミュニケーション・グループ) 以外からの他称には多用され (「お子さん」「甥 (姪) さん」など)、既に見たように状況によっては、対称にも用いられる。

「おしゅうとさん」「おむこさん」「およめさん」なども、他称として用いられるが、対称にはならない。但し「花嫁さん」「花婿さん」「御新郎様」「御新婦様」などは対称、呼掛けにも使われる。

上掲書が親族名称として一括した語彙は、親族関係のみを表す「兄・父」類の親族名称と、「おにいさん」類の呼称詞とに分けなければならない。

6.2 社会的状況における呼称

社会的コンテクストでは、目上から目下へ、例えば店長から「店員」と呼ぶことはないが、客は「店員さん」と呼びかける。先生が「学生」「生徒」と呼ぶことはないが、学校以外の人には「(調布短大の) 学生さん」「生徒さん」と呼べる。

つまり「店員」の対語は店長ではなく「客」であり、「学生」の対語は「先生」ではない。店長が「店員」と呼ばず、社長が「社員」と呼ばないのは、自分も店員・社員だからではないか。また「社員」では大勢いて、区別がつかないからでもあろう。「にいさん」だけでは区別ができないから名前を冠することを思いだそう。「伊豆山さん」という語は伊豆山家以外の人々から伊豆山家の人々を指せるが、同じ伊豆山家の人の間では、目上からでも目下からでも使うわけにはいかない。

年少とは限らない（このレポーターの方が従姉妹より年下かも知れない）。

同様に「おばちゃん」は、あなたや私の「伯（叔）母ちゃん」でも見知らぬ「小母ちゃん」でもなく、その「おばちゃん」ただ一人を指すのみである。

そうしてみると、前記教科書の次の指摘は検討し直さなければならない。

「日本語の場合は、架空に設定した人物、またはそこにいない人に話者自身が自己を同調させ、その人物にいわばなり切った視点から、対話の相手を眺める結果、ただ『おにいちゃん』と言ったり『おじさん』と称して、『誰誰の』という親族用語の原点を示す必要がない」(pp. 177-178)

日本語では一般的に、「誰誰の」のような語を用いずその意味を表し得る。例えば「今日、会社（学校、店等）はお休みです」「先生に挨拶して」は、「あなた（わたし、かれ）の会社・先生」を表し得る。コンテクストを共有するコミュニケーション・グループでは、その意味を間違えることはない。

親族語彙も、日本語のこのような一般的特徴を示しているに過ぎないのではないか。しかし親族名称は、自己中心語だからその原点が示されなければ分からないではないかと反論もされるだろう。ところで、呼掛けに用いられる語は、本当に親族語彙で自己中心語なのだろうか。社会中心的な要素はないのだろうか。

6. 親族名称再検討

自己より上の成員に関する親族名称はもう一系列ある。即ち「（お）にいさん（ちゃん）」類の他に、呼びかけには用いられない「あに（あね）」「ちち（はは）」「そふ（そば）」等がある。これは上掲書の注目するところではなかったが、重要であろう。

6.1 名称と呼称

この親族名称の二系列は、次の点で基本的に異なる。「私の父」は普通だが、「あなたの父」「先生の兄」などと話し相手に言うことはできない。「あの人（かた）の母」「誰誰さんの姉」も具合が悪い。これに反し「あなたのおとうさん」「あの人のお兄さん」は普通である。「右」「左」のような自己中心語にはそのようなことはない。

また、確かに家族内で「おとうとさん（ちゃん）」と呼ぶことはない。しかし他人からの他称は普通「弟さん」類で、「伊豆山さんの弟さん。どうぞ。」のような呼掛けもある。「弟」は「兄」の対語かもしれないが「にいさん」類の

これは勿論、家族に於ける彼女らの関係が、次世代の結婚によること、即ち息子（娘）の「おかあさま」であることを示している。ところが、この家族の息子・娘世代は上記のように、「おかあさま」という語を全く用いていないのである。また、もし「家族の最年少者に同調する」のであれば、「ばあば」「たあたん」で呼びあうことになる。

筆者も、娘婿の両親に対する対称は「おとう（かあ）さま」である。しかもこれは、彼らがその家庭で呼ばれている呼称とは無関係なのだ。他称には「姓＋さんのおかあさん」と言い、「娘婿名＋さんの」ではない。つまり「誰誰の」という関係で捉えるのではなく、「伊豆山」ではない「吉岡」のという、いわば属するグループの違いで捉えている。

以上の諸例から、対称、特に呼掛けは、「家族の最年少者」に同調しにくい場合があると知ることができる。特に、姻戚関係の上世代（親・祖父母）に対しては、他の家族の成員（自分より下）が使う対称（「おじいちゃん」「パパ」の類）さえもなかなか使いにくい。

5. 呼称の特定化

家族・親族・姻戚・他人などの線引きと、呼称を選ぶコミュニケーション・グループの線引きとは必ずしも重ならないことがわかった。次の例はそれを一層明白にする。

(28) 近くに父方の祖父母と伯父および伯母一家（義伯父、女兒二人）が住んでいる。この義伯父に対する対称、他称は共に「パパ」である。伯母一家がそう呼ぶのであるが、祖父母及び自分の一家が皆それに倣っている。希に「隣のパパ」（おそらく他称：筆者）と言うこともある。自分の父親には「父さん」を用いている。

(29) 母の友人の一人を「おばちゃま」と呼んでいる。彼女は家庭内でわが子達に「お父様」「お母様」「おじちゃま」「おばちゃま」という呼称を使わせていたので、幼い頃から（おそらく遊びに行って）そのような呼称になったものであろう。今「おばちゃま」と呼ぶ人は他にはいないから、自分の家庭内では「おばちゃま」がその人を指すようになっている。

上の二例は、共に呼称が特定化した例である。即ちそのコミュニケーション・グループでは、「パパ」は「私のパパ」「あなたのパパ」「彼らのパパ」ではなく、「隣のパパ」なのである。そして、その「パパ」の子供（従姉妹）の年齢は分からないが、「パパ」と呼ぶコミュニケーション・グループの中の最

は共通だが、祖母1からは呼び捨てにされる場合もある。自分の方からも喧嘩の場合など「ばばあ」と言ってしまうこともある。祖母と両親相互の呼称は次の通りである。

祖母1 ← 父：ばあば、おかあさん

← 母：ばあば

祖母2 ← 父：たあたん、かあさん、おふくろ

← 母：たあたん、おかあさん

各自の義母に対しては共に「おかあさん」という語が用いられている。

祖母1 → 父：パパ、名前+さん

→ 母：ママ、名前

祖母2 → 父：名前

→ 母：名前+さん

祖母2（父方）は最年少者に同調した呼び方をしていない。

レポートをはなれ、筆者自身の例をあげる。

(23) 夫の弟及びその配偶者から「(お) ねえさん」。

(24) 夫の両親とは、結婚後すぐ外国に住み直接呼びかけることがなかったが、手紙などは当然「お父様」であった。同居したときは孫がいたので「おじいちゃん（おばあちゃん）」に移行した。夫の両親からは「名前+さん」及び「ママさん」であった。

(25) 夫は義父を「お父さん」と呼びかけたと記憶するが、最晩年に同居した義母には、他の家族が「おばあちゃん」と言っているにも関わらず、そう呼びかけることはなかった。他称は共に「住所名+おじいちゃん（おばあちゃん）」であった。一方長年同居の自分の両親には対称としても「おじいちゃん」の類を用いていた。

(26) 今年結婚したばかりの娘（別居）の夫からは、他称としては使われている「おかあさん」で呼びかけられたことはない。娘は夫の両親（別居）を「おとうさん（おかあさん）」と対称で呼び、自分の夫には対称そのままを他称とするが、我々には「姓+さんのおとうさん」と言う。

結婚による親子、兄弟姉妹関係での他称の使用は、少しの例外⁵⁾を除けば、ほぼ原則どおりなのである。しかし対称はそうではない。

では、姻戚関係中の同世代の呼称を見よう。

(27) 上記(22)の家族で、この祖母どうしは、互いに「おかあさま」と呼ぶのである。

(17) 末子の自分は自称詞「わたし」を使っているが、二匹の犬の前では「おねえちゃん」と言う。

上例を血縁関係がないから、親族名称の虚構的用法だとするのかどうか。二匹の犬が「家族の最年少者」なのだろうか。確かに、この本人より後から家族に加わってはいる。

これは、家族の構成の面からばかりではなく、「おねえちゃん」類を考える上でも面白い事例である。

4.2 姻戚関係

結婚による人間関係は家族をより複雑にする。父母、義父母に関する親族間の呼称の微妙な差異がレポートされている。自分の親兄弟に対する呼称と夫(妻)の親兄弟に対する呼称とが微妙に変わる。同居か別居か、外孫か内孫かなども影響する。

(18) 父方、母方の祖母がいる。私は共に「おばあちゃん」と呼ぶ。しかし母親は自分の母を「おばあちゃん」とよぶことはあるが、夫の母(父方の祖母)を「おばあちゃん」とは呼ばない。「おかあさん」である。

(19) 母は自分の兄弟姉妹は「兄さん」「姉さん」と呼び「お」は付かない。しかし夫の兄、姉には「お兄さん」「お姉さん」と呼ぶ。

(20) 父は、家族のいる時に義父母を「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ぶが、それ以外の時は義父母に呼称を用いることを避ける。自称さえ避ける。それに反し母は、義父母を「お父さん」「お母さん」と呼ぶが、亡義父から呼称を用いて呼ばれた記憶はない。

(21) 祖母との会話中、自分(S)は父親のことを「お父さん」というが、祖母は「Sのパパ」と言う。「パパ」は3才位まで使って、その後は「お父さん」に変えたのに祖母は変えない。一方、自分は母親を「お母さん」と呼んでいるが、祖母は母を「かずよ」と名前の呼びすてにする。

この祖母は母方だとすぐ分かる。この父と義母(祖母)の間の対称が何かは知りたいところだが、報告されていない。ちなみに父方の祖母も同居だったようだが既に他界された。御存命の頃どの様な呼称を使われたことだろうか。

(22) 両親、妹、弟、祖母1(母方)、祖母2(父方)の6人家族。(祖母1は始めから同居だが、祖母2はそうではないらしい。)

幼い頃から、祖母1には「ばあば」祖母2には「たあたん」と言う。祖母から自分への呼び方は微妙に異なる。即ち、双方の祖母からの、「名前+ちゃん」

また「家族の最年少を想定する」としても、その「最年少者」は仮定ではなく、集団内に現存していなければならず、その人が現実に関わった経験があるか、当然ある筈（赤子で口がきけない場合⁴⁾）でなければならない。そうだとすると、筆者が祖母を指し表したい時の家族と、祖父を指し表したい時の家族とは違うということになる。

3.3.2 両親の世代

孫年代が両親の兄弟姉妹を「おじさん（ちゃん）」の類で呼ぶのは当然だが、祖父母の兄弟姉妹をもその呼称で呼ぶことも一般的である。その呼称が親族関係を表すのなら、正確に「大おじさん」の類で呼び分けなければならない筈である。例えば、我が家では祖父母の兄弟は「姓（住所名）＋の＋おじさん」類、両親の兄弟は「名前＋おじちゃん」を他称とし、対称には共に「おじさん（ちゃん）」を用いる。妹の家族は、両世代に対して共に「（名前＋）おじちゃん」類を用いている。

祖父母の兄弟姉妹は遠いから特別な呼称がなく、血縁関係がない人と同様な虚構的用法なのだと考えることもできる。しかし両親の伯父（の類）が突然血縁関係のない人と同じになるということのも納得できない。では両世代とも親族として同じ「おじさん」の類でよぶのだろうか。すると、血縁の密度と虚構的用法との線引きはどうなるのか。

更に言えば、何故父母の兄弟姉妹への呼掛け語が親族名称で、血縁関係のない人に用いられた時は虚構的用法だと考えなければならないのか。「おじ（おば）」という親族名称があるからといって、それに接辞を付けた形も親族名称であるという保証はない。先の「佐川さん」の例では、「佐川」は会社名だが「佐川さん」はそうではないのだ。

4. 家族の範囲

上掲書の「家族」がどのような構成として捉えられているのかは、必ずしも明瞭ではない。前節で見たように、親族関係のみを表す語（「父、兄」等）と異なり呼称は、「家族」を考慮に入れなければならない。家族とは、自分の親兄妹中心なのか、結婚後の子供がいる現在なのか。なかなか微妙である。

4.1 ペット

最近ではペットも家族に加わった。

親族名称を用いるもので、老人に「おじいさん」と呼びかける。小さい子供に対して自分を「おねえさん」「おじさん」等と言う。

もう一つは、虚構的家族の最年少者を想定して、その人物と同調した視点から、相手や自分を捉える。例えば、小さい子に对称として「おねえちゃん」と呼びかけるのは、いるかいなか分からない最年少者（弟妹）を想定して、その視点に同調しているのである。

以上の2点を検討してみよう。

3.3.1 祖父母の世代

先日、テレビに103才の老婦人が映っていた。司会者（男40－50才位）は頻繁に「おばあちゃん」と呼びかけていたし、「このおばあちゃんは」と他称にも用いていた。後にその家族も登場し、小さい子供達は曾孫であろうと思われた。しかし司会者達は「ひいばあちゃん」というような語を発することはなかった。

「きんさん」「ぎんさん」も曾孫は何人もおられることであろう。ひょっとすると玄孫もおられるかもしれないが、「ひいばあちゃん」とは誰も言わない。

社会的コンテクストでは、最年少者は孫止まりで、孫以下を想定することはない。

それでは親族の場合はどうであろうか。

筆者の父方の祖母（結婚前は同居、以後別居）は88才で他界した時、6人の曾孫がいた。上掲書の説通り、私達兄妹は「おばあちゃん」または「ひいばあ」と呼んでいた。平行して父母（結婚後別居）は「おとうさま」「おかあさま」または「おじいちゃん」「おばあちゃん」、であり、後者を他称として用いる時は夫の両親と区別がつくように、住所名を冠した。祖母の夫（祖父「おじいちゃん」）は既に20年前に死亡し、曾孫とは縁がなかった。

さて、今全員この世にいないから、対称としては使えない。しかし他称として、父（母）を「おじいちゃん（おばあちゃん）」、祖母を「ひいばあ」と呼べるが、祖父を「ひいじい」で指すことはない。筆者兄妹の会話中、父と区別をつけたい時は、「名前＋おじいちゃん」を用いる。例えば「ひいばあのお命日」というが「ひいじいの」とは言わないで「（名前）おじいちゃんの」という。子供達に写真でも見せれば「あなたのひいおじいさん」と言う。

上の事実は、家族内のこれら呼称が、単なる関係を示す親族名称なのではなく、「生身の具体的な人」を指す語であることを示唆している。

(12) 高校同級の友人(女昭和7年生)は、年令差の大きい上5人が女(名前+ねえさん)、次に3才違いの男(おにいちゃん)がいる。ところが彼女は、二才下の妹とは互いに「めこちゃん」「かよちゃん」と愛称を用いている。

(13) 高校同級の友人(女昭和8年生)は、上から女4人男4人の姉弟である。下から上への呼称は次の通り。長姉は「おねえさま」それ以下は「名前+ねえさま」。男の一番上(昭和16年生)は「おにいさま」だが、それ以下は弟達から「みのっちゃん」「ひでおちゃん」と呼ばれている。末弟は上と5才離れているが二人の兄に「にいさん」の類を用いない。

(14) 友人(女昭和4年生)は各三才位差のある5人兄妹(男, 女, 男, 女, 女)の2番目である。上と5才差がある末妹は、長兄を「おにいちゃん」それ以外は「名前+にいちちゃん(ねえちゃん)」, 弟も同様の呼び方をしているが、その次の妹(昭和11年生)は彼女を「はこちゃん」と愛称で呼び「名前+ねえちゃん」を用いない。

兄弟姉妹が多いときは、下にいくにつれて名前(愛称)で呼び合うことが増えるようである。一番上の兄姉及び年齢差のある兄姉は「にいさん」「ねえさん」類で呼ばれることが多いようであり、女子(男子)中の最初の男子(女子)もその傾向がある。男女別、年令構成、親密度(同居の時期、期間)等等いろいろな要素がそれらを決めているようである。

ところで、個人名を呼ぶか、「にいさん」類を使うかについて、次の指摘は注意に値する³⁾。

(15) 姉妹弟の三人が全員愛称で呼びあい、両親もそう呼ぶ。しかし両親は機嫌の悪いときや怒っている時、名前の呼び捨てに変化する。

(16) 母は兄が小さい頃から妹(自分)の前で、兄妹喧嘩の仲裁以外に「おにいちゃん」とは呼ばず「名前+ちゃん」で呼んでいた。しかし自分は「おにいちゃん」と呼ぶ。

一般的に、年上の自覚を促したい時(兄弟喧嘩で年上を控えさせたい時など)、「にいさん」類を言うことがよくある。これのもつ意味も考慮すべきである。このことは、他人の前で、「ねえさん」類を使うことと関連があるのではないか。

3.3 上世代への呼称

上掲書では、親族名称の虚構的用法を、2種類あげている。

一つは、親族名称の本来の使い方に則ったもので、血縁関係のない他人に

言っている」と知っていた。

(4) 三人姉妹は互いに「ゆーちゃん」「まーちゃん」「さーちゃん」と呼び合う。しかし友達と話をしている中では使わない。(何ということばを使うか不記載)

(5) 妹と弟がいるが、全員愛称で呼び合っている(れいたん、ああちゃん、かあくん)。妹は最初「おねえちゃん」、次に「おねえさま」(テレビドラマの影響)から「れいたん」と変化させた。(最後の呼び名は、弟ができたことと関係があるか。)

「近年」が正確にはいつ頃を指すか分らない。しかし人前ではとにかく内々では、かなり以前から兄弟姉妹が「にいさん(ねえさん)」類を使わず、互いに名前(愛称)を呼び合っていたと思う。

以下身近な数例をあげる。

(6) 筆者(昭和8年生)は、三才上の兄には「おにいちゃん」だが、二才違いの妹とは幼い頃から互いに愛称で呼び合っている(「あっちゃん」「みっちゃん」)。小学生の頃、友達の前では妹に対して「おねえちゃんがしてあげる」のような言い方をしたこともある。

(7) 夫(昭和6年生)には各二才、七才違いの弟がいる。末弟は二人の兄を「名前+にいさん」と呼んだが、上の二人は互いに「名前+ちゃん」で呼び合っていた。現在は「名前+にいさん、兄貴」と名前の呼び捨て。

(8) 妹の夫(昭和6年生)は末子だが、二人の姉(各三才上)を、幼い頃から「みいちゃん」「すみちゃん」と呼び、姉弟三人とも「お姉さん」の類を用いたことはない。彼自身も「けんちゃん」と愛称で呼ばれる。

(9) 父方の従姉妹は、昭和8年から13年までに生まれた女・女・男・女、22年生まれの子という構成の姉弟である。一番上は「おねえちゃん」だが、次姉以下は「きょうちゃん」「なっちゃん」「あっこ(ちゃん)」「ようちゃん」と愛称で呼び合う。

(10) 義弟(夫の弟)の義父は、女、男、男、男、女、女、男の7人姉弟(85才から68才)だが、その末弟からの呼称は次の通りである。上から三人までは「名前+ねえさん(にいさん)」その次からは「善さん」「静子ねえさん」「まっさん、まっちー」である。

(11) 高校同級の友人(女昭和8年生)は3人兄妹で、長兄を「おにいちゃん」次兄を「ちいぼう」と呼んだ小さい坊やが語源らしい。中学の頃、この呼び方では良くないというわけで、「名前+さん」に変えた。

(2) アルバイト先に出入りしている佐川急便のお兄さんのことは、「佐川さん」と言う。(下線筆者)

このような「会社名等+さん」の習慣は広くいきわたっている。銀行などで呼び出すときによく聞かれるばかりか、「銀行さん」「三菱さん」のような言い方もある。

上例の「佐川さん」は、特定個人でなく、特定の役割を持つ個人を指す。転勤で人が変わっても呼び名は変わらない。他にも、例えば運送業者の集まったところで、「私達のような小さい業者と違って『佐川さん』や『黒猫さん』はいいですよ」のような発言もあり得る。この場合は、その会社ないし今そこにいるその会社に属する人、あるいはその会社で働く人々を指し得る。

個人名は常に同一人物を指し示す。同一人物はその属する集団毎に異なる呼称で呼ばれる。ところが上例は、同一集団での同一呼称が異なる人物を指し表し得ることを示している。中身が空の枠だけのようなものである。職業名を呼称に用いるのもこちらに属する。

いずれにせよ当然のことながら、呼称とその指される人との関係はその集団（コミュニケーション・グループ）毎に決まるのである。

3.2 同世代（兄弟姉妹）間の呼称

前記教科書は、親族間の呼称の五原則をあげている。議論に関係する原則だけを次に記す。(前掲図参照)

(二) 話し手は、分割線より上の人を普通は親族名称で呼ぶ。

(三) 話し手は、分割線より上の者を名前だけで呼ぶことはできない。

勿論これは原則であって、特定の家族内で何かの理由からこの規則を破っていることも皆無ではない（例えば近年都会では、年齢の近い姉妹が、相互に名前で呼び合うケースがいくらか見られる）。(pp. 151-152)

しかし、上記（三）の例外は、「特定の家族内で何かの理由で」というわけではなく、かなり広く行われていたことであり、現在も行われていることではなかろうか。

(3) ある友人の妹は、私の前ではその姉を常に「おねえちゃん」と言っている。ところが、その友人に妹からどう呼ばれているか尋ねたところ、家庭内では「名前+ちゃん」であるとの答を得た。「おねえちゃん」ではないのかと尋ねたところ、その友人は「友達に私のことを言うときはおねえちゃんと

次に親族名称の虚構的用法（実際には血縁関係のない他人に対して、親族名称を使う）を考察し、自称詞としての虚構的用法が豊富であることを示し、親族名称が究極的には家族の最年少者を基準点に取り、呼びかけられる人あるいは言及される人物が、すべてこの最年少者から見て、何であるかを表す用語で示されるという点が特徴であるとした。

自分の娘に「ママ」と呼びかける。親を「おじいちゃん」という。他人の子供に「おにいちゃん」という。自分を「おじさん」という。このような事例をあげ、社会的コンテクストに於いても、虚構的家族の最年少者（存在するかどうかも分からない）を想定し、その仮定の人物に話者自身が自己同一化を行うのであると説明している。(pp. 173-177)

この親族名称の子供中心的な使用、他者中心的な使用から、日本人固有の行動様式の考察へ移り、対象（相手）依存の自己規定へと話を進めている。(pp. 163-197)

3. 問題提起

核家族化が言われて既に久しいが、学生達の家族も一昔前に比べればかなり単純化されてはいる。しかしそれを補って、友人仲間の男女、年令、親密度等による微妙な呼称の違いはなかなか豊かである。

ここでは、上掲書で鈴木氏の取り扱われたことに関連するものに絞り考察する。番号をふった事例は、特に断わらない限り、学生からの報告例である²⁾。

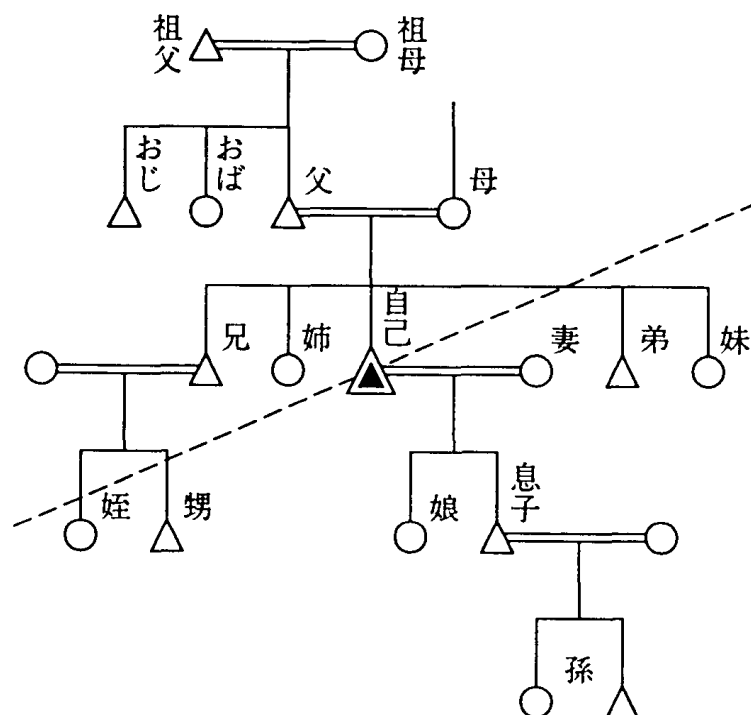
3.1 一般的呼称

前掲書には、呼称として特に記述されていないが、ここでは、最も一般的な呼称接辞「—さん」から始めよう。

(1) レストランには正社員とアルバイトの人がいる。アルバイトはかなり大勢いて、同一待遇で働いており、男女年令もさまざまである。そこでは誰にでも「〇〇さん」という普通の呼び方をする。一方、社員に対するこちらからの呼び方は「〇〇さん」だが、社員（複数）からは私には、姓ないし名前のよびすてである。この方が親しみやすさを感じる。

微妙なアルバイト先の間人間関係を示しているし、中性的な「姓+さん」の特徴が出ている。レポートで見る限り、学校でも親しい友達どうしで「姓+さん」で呼び合うことは、まずない。これは呼称「(お)にいさん」類の接辞を考えるときの参考になる。呼び捨てに親しさを感じることに注意しよう

それはここに掲げた図にしめされている。



分割線より上の成員に対する：

対称詞は親族名称しか使えない

(父親に「あなた」と言わないで「お父さん」と言う)

自称詞は親族名称が使えない

(父母に対して自分を「娘が」等と言えない)

分割線より下の成員に対する：

対称詞は親族名称が使えない

(弟妹に「弟ちゃん」等と言えない)

自称詞は親族名称が使える

(子や孫に「お母さんが」「おじいちゃんが」等と言う)

ある特定の親族集団内では、目上の者は目下の者が自分と呼ぶ、そのことばをひき取って、自分のことを称する。例えば、「おじいちゃん」は孫に対してだけでなくその母親に対しても「おじいちゃん」という。「パパ」と呼ばれる人は自分のことを「おとうさん」ではなく、「パパ」と言う。このように日本語には、自己中心語¹⁾である親族名称の他者中心的用法という特徴がある。

社会的状況の呼称でも、上下の分割線は守られ、親族内の原則が拡張的にあてはまる。目上を地位名称で呼ぶ(先生・課長)のは普通だが、逆はない。「おい生徒」は言えない。

日本語の人物呼称

——短大生のレポートによる再考——

伊豆山 敦 子

1. 初 め に

平成4年及び5年度に、調布学園女子短期大学日本語・日本文化学科の「比較言語文化」という科目を担当した。「外国語は嫌い」という学生にアレルギーをおこさせないようにと思いながら、教科書は鈴木孝夫氏の名著「ことばと文化」(岩波 1973)にきめた。

上記の教科書に「人を表すことば」という項目がある。自分や相手をなんと呼ぶか、人称代名詞、親族名称等に、社会言語学的な優れた考察がある。これに関連してR. バーリング著、高原・本名訳「言語と文化」の中から英語の呼称に関する章をを学んだ。そして前期のレポート課題に、この「人を表すことば」を選び、「具体的に自分の周囲を観察するように」と注文した。

これは思いがけず(というのは不明のいたりだが)学生の興味を呼び、捨てるには惜しいような注目すべき観察・考察が含まれていた。それは、筆者自身が常々感じていた疑問を改めて考える機会となった。

呼称は日本語教育の上からも重要である。日本語を通し日本人の行動様式や心的側面を知ることができる。概して言えば、しかたないこととはいえ、日本語教科書の中の呼称は貧しいのである。

2. 人を表すことば

上掲書による鈴木氏の説を簡単に紹介しておこう。

日本語に於いては、自分や相手を表すことばとして、人称代名詞(わたし、ぼく、あなた等)、親族名称(おとうさん、おばあちゃん等)、地位名称(先生、看護婦さん等)などを一括して考察する方が事実になっている。それらを自称詞(話し手)、対称詞(相手)、他称詞(第三者)と名付け、自称詞、対称詞の使い方には、上下の分極が見られること、社会的なコンテキストのものでも親族間の対話のパタンの拡張とみなすことができることを説いている。